備陽史探訪
第42号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

有地氏の城跡

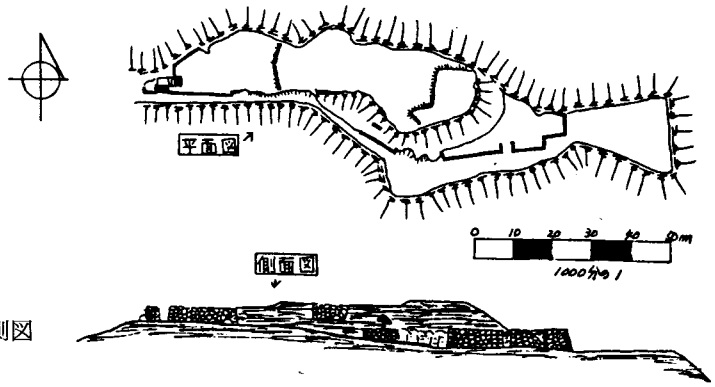
田口　義之

中世、福山市芦田町一帯を領した有地氏は、品治郡新市亀寿山城（芦品郡新市町新市）を本拠に備後国最大の勢力を誇った国人大名宮氏の庶家（分家）で室町時代末期（大永年間一五二一－二七）、宮石見守清元が亀寿山城を出て芦田郡有地村に住し有地氏を称したのが始まりである。清元の後は刑部少輔隆信、民部少輔元盛と三代続き、隆信は天文年中（一五三二－一五五四）毛利氏に属し、弘治年中（一五五五－一五五七）東隣福田村利鎌山城主福田遠江守を討ち、その所領を合せ、三代元盛の代には新市附近の本家宮氏の旧領をも合せ、北は神石郡高蓋村、西は府中、東は戸手、近田迄その支配下に収め、毛利氏旗下の有力部将として活躍した。

城郭の面では、初期の国竹城は城と言うより平時の居館と言った方がよく室町期の築城と思われ防備が弱い、後に築いた大谷城は峻険な山城で、戦国時代の到来と共に有時に備えたのであろう。又、三代元盛が天正初年（一五七三頃）に築いた相方城は全面的に石垣を使用し、櫓・城門なども白壁・瓦葺きの半永久的な構造で中世城郭から近世城郭への移行途上の城郭として小早川隆景の築いた新高山城、神辺の黄葉山城などと共に県下でも貴重なものである。特に石垣の遺存状態は県内山城の中でも最良と言われる。

すなわち、有地氏は平時の居館である国竹城から戦乱の時代に入って山城である大谷城を築き、安土桃山時代にはいると近世的城郭である相方城を築くというように、時代と勢力に応じた城郭を築いて室町戦国という戦乱の時代を生き抜いたのである。

以上、有地市の城郭は室町戦国時代の典型的な地方豪族の城跡として貴重なものである。



相方城跡略測図

明善寺山城跡を見学して

小島　袈裟春

「明善寺崩れ」、の事を知ったのは数年前「小田郡誌」を読んだ時でした、西の毛利氏と結んだ備中の三村家親は、全備中を制圧し、備前も旭川右岸まで進出、岡山城（当時の石山）の金光宗高、舟山城の須々木豊前等を降服させ、更に美作に進出した、所が家親は永録九年美作を転戦中宿舎の興禅寺で、宇喜多直家の放った刺客、遠藤兄弟に射殺されてしまった。この為三村一族は、直家を競争相手としてよりも、親のかたき、として狙ったのも無理はないと云える。しかし何時の世でも云える事だが、感情が先走っては真実が見えなくなる。逆に直家の策略に掛って明善寺山城に誘い出され大敗してしまった。

味方と信じた岡山城の金光、舟山城の須々木が直家に買収されて誘い役をしたと、小田郡誌は記す。以後の三村一族は敗けが込んだ博打うちの如く次々とミスを重ね、勇将を失い、自滅への道をたどる事となった。

私は冒頭に書いた如く、小田郡誌か

ら読んだので、三村ファンだったが、何しろ宇喜多方五千人に対し四倍の兵力を持ちながら、わずか数時間で惨敗したとは、ファン、としては納得が出来ない、何とかして明善寺合戦の跡をたどり度い思いでした。今回計らずも探訪会でこの遺跡を尋ねる事を計画し、更に事前に、宇喜多一族の事跡、を発刊された、立石先生の講議まで持たれた事は逆の立場とは云え望外の喜びでした。

さて、明善寺山城跡に立った感想は、「城としては不適な地形」でした。後方の操山に頭を押えられ、山自体がなだらかで展望は利くとしても、攻めるに易く守るに難い、従って城の支えとして後方の操山こそが「天王山」と云えそうです。当時の旭川本流は東に大きく湾流し操山の近くを南流して居たと、服部先生は説明されました。

三村方右翼軍が明善寺城の後詰として旭川を渡り操山に向おうとしたのも当然だし、宇喜多直家が宍甘鼻に居ると見せかけ、三村方の動きを見ると一挙に明善寺山城を落し操山に陣したのは誠に見事な戦略と云える。落城に気付かぬ三村右翼軍は長蛇の列で旭川を渡る、私しは十八史略、にある、「宋襄の仁」、を思い出しました。紀元前六五〇年頃「春秋時代」、の始め頃、宋は泓水で楚の大軍を迎えた。楚軍の半数が泓水を渡る頃、宋の参謀は、王の襄に「大敵を破るは今こそ好機」、と云った所、襄王は「敵の態勢が整わぬに攻撃するは卑法である」、と云って敵が渡り終えてから戦いを始め大敗した故事を云う。直家は違った、川を渡って来た順に面白い様に討取ったのであろう。戦術を絵に画いた如く……立石先生の本にも国富村と川の間で多数が討死した、とある。左翼の三村元親の本隊は遥か北の四之御神山で明善寺の落城を見、作戦の失敗に茫然として居た、ともある、三村の中央軍は疑心暗鬼で進む内南の山際から攻撃を受けた、始めは互角だったが、右翼軍を破った直家の隊が横から突入、指揮官石川久智が討死するに及んで総崩れとなった、も早や三村方は全軍集結するには時間がなかった。……ああ……何たる事だ。かくて三村軍は各個撃破されたのだ。

明善寺山城跡の見学を終えて、かつての激戦の跡の平地に降りて来ると、突然頭上が暗くなり、パラパラと、冷たい雨が落ちて来た、まるで永録十年に散った、三村の将士の無念の涙のように。

那須与一に子があった

柿原　義弘

六月十二日（日）当例会で井原市荏原の諏訪神社並びに永祥寺への探訪研究に参加させていただき色々と勉強させていただき楽しくよい一日を過させていただきました。さて話題に入りますが私友人と歴史のことで話して居りました。とある時この例会のことを話しました所、その方が那須の与一の事は少々は知って居るが詳しい事は井原市青野町の法輝寺の住職さんがよく研究されていてその方に聴かれたら知りたい事は何でもわかると知らせて下さいました。そこで私は早速法輝寺さんに突然参るのも迷惑と思い電話を何度もしましたがなかなか連絡が付きませんでしたがようやく連絡がつき法輝寺さんに尋ねる事が出来よく与一について知りたいと遠方より尋ねて来て下さったとおっしゃって戴きお言葉に甘えてついつい長居をさせて戴きお話しを拝聴させていただき本当に感謝いたしました。で先生（住職）は町史の編修、寺の務め、古文書の整理その他お役多忙な先生でありましてその様な事とは後でわかったのですが知らずに非常に恐縮の想いでございました。でも喜ばれましてスライドをお見せしましょうか等とおっしゃって下さる等して下さいましたが時間を気にして遠慮致しました。そのスライドの事ですが今度那須家の九百年記念行事で此の度は特にお忙しい日々を過して居られる様です。余談では御座いますが先生が今史誌の整理する資料を見せて下さいましたが、手づかずの資料がみかん箱に何杯もありました。それを見て私は先生の博学とタフさに驚き入りました。この仕事を見せて戴き邪魔と見て失礼しました。那須家八百年記念行事は那須家について由かりの当井原市と栃木県太田原市との姉妹都市と云うか共に友好を計って共に先祖供養と云いますか長い歴史を八百年と云う区切りで振り返って見ようと云うことで行われる事とのことです。さて私事では御座いますがある本を読んで居りました処私那須氏については僅かの知識しかございませんが那須氏と北条早雲とのかかわりつまり早雲の出所又同じ荏原での所領がどうであったかのことに興味がありました。その後、話は変りますが備後福山への仏教が入りどの様な拡が

りをしたかを自分なりに調べて居りました処那須氏にかかわることが見つかり、先日先生にお聴きしたことと違いのある事で私この事を放って置くことが出来ず、又先生の処にようやく連絡をつけて時間をさいて戴き参りまして、此の事をお話し申し上げました処、びっくり、考え込まれ大変だなあと云われるか喜ばれていると云いましょうか、こう云う事があったかなあと考え込まれておいでした。と云いますのも此の度の八百年記念に史記として作られていたからです。（井原市と太田原市の研究者の方で）その様な背景がありましたので私としても喜んでいゝのか複雑な気持も交錯です。その様なことで私も私なりの資料を差し上げ今後先生に御調査研究される事を願って居ります。でも本当に喜んで戴きました。そして早い機会に太田原市の研究者と共に研究される事と思います。今後の成果がたのしみな事です。然し馳け出しの私が申しますのも気の引けるものですがこの調査されて成果が出るのも時間がかかるのではないかと私見ですが思います。云いますのは此れを詳らかにするには真宗の中西国への弘通即ち明光上人が備後山南村光照寺を開基された紀源を詳らかにしなければならないからです。正論もある訳ですが最近異説が出て来たからです。此の点については私なりには考える処がありますがその様なことを先に申し上げた訳です。肝心の那須氏のかかわりと申しますのはこの様な事を詳らかにしないと史実に詰びつかないからです。その明光上人（親鸞聖人の門弟）は大織冠謙足公の後裔で和泉守季平六代孫頼康第四の御子で右大将頼朝公の甥であられる。高位の方であったのでこの方が中西国に真宗仏教の教化弘通をするため先に申しました備後山南村へその拠点に光照寺を開基されたのです。此の地に遠く相州鎌倉よりですので頼朝公じきじき警護の家臣を差し廻されてこられた様です。それは従者、与力（武士であり警護する役）随身（布教の手伝い元武士）を多数連れてこられたと伝って居ります。その与力も上人の高徳に服し剃染し師資の約を結んだと云うことです。那須氏と少し話はそれた様ですが実は随身六坊（六人のこと）の内一人が西圓（僧名）で後金江町平田にある西圓開山の松慶山大東坊であります此の方が俗姓那須与一宗高の三男亀之丞成房と俗に申していたと云うことです。従って以後二十数代にわたり今に那須家を継承されている様です。又福山特に金江方面には那須姓が多数あることが興味のあるところです。問題はこの事で今迄那須与一には、子供がなかったと云うことが調べられていたのです。肝心の事を最後に申し上げ申し訳けありません。この事を事務局長田口様にお伝えした時、今わかっている事だけでよいから会報に投稿する様にと云われて居りましたが、まだ私が史記を見て発見した丈けで此れと云った調べも致して居りません。ただ源平合戦（一一八五年文治元乙己年二月十九日）又親鸞聖人とのかかわり（国史上の年記）など手掛りになる物の年記等との相関を見れば良いと思います。後は先生の御調査成果次第で、私察ではありますが明光上人についての何等かの有力な係りとなるのではないかと思われます。非常に興味深い事で成果が待たれるものです。

最後に此の事を私発見したに過ぎませんが例会に参加させて戴き勉強させて貰った事からのことで世話方々には感謝致して居ります。

終りとします。

福山市山手町一〇九二ー二

古代の山城　茨城について

井村　富貴男

福山市加茂町北山芋原　標高四〇〇米　家数七〇戸の小部落　これが私の住む所です。芋原の地に昔より「大すき」と云われている空堀が有ります。これは東西約一〇〇〇米、南北五〇〇米のだ円形で部落を鉢巻型にとりまいています。北側から東側にかけては空堀がはっきりしております。その長さは、約一〇〇〇米西側と南側は今はこわされてはっきりしない部分も有ります。

日本書記に出て来る養老三月十二月に備後の国安那の茨城芦田の常城をとどむと有りますが、これが北山芋原の地に有る茨城ではないでしょうか。

他の古代山城は出来上って居たが茨城と常城は建設中に朝鮮と我国との和平交渉がなり城建設の必要がなくなったので建設なかばで中止になったのではないでしょうか。

芋原の地が古代山城の条件に適しているだろうか。標高四〇〇米、東西南と三方は急峻な山であるため、緊急時に立て籠るのには適して居ます。

又、多人数が立籠るための必要な水はどうか。芋原の井戸をしらべて見ると良く出ると云われる井戸が数ケ所有ります。

こうした条件を見ますと此の地が茨城であったとしても良いのではないでしょうか。

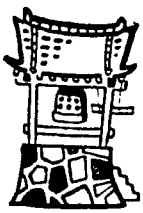
むらせ

ようやく部会念願の加茂町にある合の坪古墳の測量調査が再開できる運びとなりましたのでお報らせ致します。

日時は、来春（一九八九年）の一月十五日（日）の午前九時頃からです。

測量調査を一緒にやっていただける方、その他、知りたい事があれば当会事務局及び当部会の山口哲晶（三一ー七五六三）迄御連絡下さい。

古墳研究部会



待望の論文集発刊

城郭研究部会

昨年一月より始めた当部会主催の「中世を読む会」もこの年末で満二年を迎える。そこで何か記念になるものを、という要望に答えたのが今回発刊された「中世を読む」である。内容はテキストに使っている「山内首藤家」（庄原市甲山城主）に関する論文がメインだが女性会員の随想もあり、わずか三〇ページ余りの小冊子だがきわめて興味深いものとなっている。

中世を読む

城郭研究部会中世を読む会編

内容

鎌倉初期における山内首藤家について　出内　博都

山内首藤氏と寺院・神社　――覚え書き――　堤　勝義

雑感　「中世成立期の武力」　下津間康夫

尾多賀文書　―親□書状に就いて―　田口　義之

（随想）

雨月物語とふるさと讃岐　佐藤　秀子

B5版二十九ページ　一部六〇〇円

郵送希望者は送料共八〇〇円を添えて左記迄申し込んで下さい。

〒720　福山市多治米町五ー一九ー八

中世を読む会事務局

（田口方）

TEL〇八四九（五三）六一五七

第二十三回　中世を読む回のお知らせ

テーマ　備北甲山城主山内首藤家文書を読む（2）

時　十二月十六日（金）午後七時ー九時

場所　花園町　中央公民館和室

会費　無料（初めての方はテキスト代要）

活動日誌

城郭研究部会

八月十九日　第十九回中世を読む会　参加十名

九月十六日　第二〇回中世を読む会　参加八名

十月二十一日　第二十一回中世を読む会　参加七名

十一月十三日（日）　午後二時ー四時　於福山城湯殿、リレー講演会「備後の中世武士ー山内首藤氏等ー」　講師出内博都、堤勝義、下津間康夫、田口義之、白井比佐雄　参加十五名

郡山城跡を見学して

小島　袈裟春

晩秋の吉田町行きは探訪会の好例により、晴れては居たが又寒い一日でもありました。

始めて見る郡山城跡は麓も山頂も大木が鬱蒼と茂って、余り見通しはきかず城跡の全容を一目に、と云う訳には行きませんでしたが、案内の末森先生の丁寧な説明で、尾根尾根の郭趾を尋ね歩き、戦国初期としてはまれな壮大さを実感致しました。当時は山麓の要所に石垣等を廻らしてあった、とあるからまさに全山要塞だったのでしょう。又、山の印象としては意外に谷が深く水が豊富で、資料にある、天文九年の八千人、五ケ月間籠城も、充分可能だったと思いました。

毛利元就は大永三年（一五二三年）家督を継ぐと直ちに郡山城の大拡張を始めた、と云うがこの如き大城、当時毛利氏一族の所領（兵力）からすればとても守り切れる、とも思われない城、を築いたのでしょうか…事実この十七年後天文九年籠城の時でさえ吉田町の資料によれば、兵士は二千五百人だったと記してある…元就は勿論難攻不落の城を目ざしたに違いないが、私しは多分朝鮮式の山城、逃げ城、を意識して居たと思う。そして後年この思惑はピッタリ当った、前述の天文九年尼子軍の来攻は九月始めだと云う。この時期は稲の取入である。多分元就はこれを見越し、稲の取入れを早めたであろう、刈取ったまゝの稲束もあったであろう、米を農家に置かず、農民共々城内に入れた。まさに食糧丸抱えの逃げ込み城だ、後は敵の動きを見れば良い、籠城か、迎撃か、迷う必要はないのだ。元就はやはりここまで見越した大改修だったと思う、籠城が長びき敵の食糧が不足すれば士気は落ちる。援軍は必らず起こる、勝抜けば近国に幅がきく、そして事実その様になった。

元就の偉さを再認識した吉田町行きでした。

終りに全く違う話しですが、吉田町資料館を出しなに、陳列棚の中に郡山城合戦記、と云う本が目に付きました。買おうと手を出し掛けて止めました。理由は、分り切って居るのに何を今更、と云う心境でした。しかし、帰りのバスの中で田口副会長の、感想文を、と云う声に乗せられてこの文を書くに当って「何も分っちゃ居なかった」と気付きました。いやはや、元就と違い、後悔先に立たず、の旅でもありました。

吉田郡山城跡を訪ねて

後藤　匡史

十一月の例会は、末森氏の毛利元就の居城高田郡吉田町の郡山城である。

毛利元就と云えば、三矢の訓辞や百万一心で有名である。

そして行きのバスでは、戦国の三義戦と云われる厳島合戦の故事からあの赤穂浪士の合言葉が山と川ならこちらは勝つかと云えば勝つ勝つとこれを音頭をとって私が勝つかと云えば皆んなが勝つ勝つと応答……奮意気が昂り上がった所で軽く一発、三橋美智也の古城を唄えばバスはスイスイと進み、アッーと云う間に吉田の郷土資料館に着き、ここでは館長さんの熱のこもった説明を聞きながら、それから芝のじゅう丹の様に敷き詰められた落葉を踏みしめ元就や毛利一族の墓所や百万一心の埤では末森氏が熱弁をふるい本丸頂上附近で丁度昼食の時間となった。

此の前九月十五日、下見に末森氏や佐藤錦ちゃん兄弟で来た頃はまだ山に蚊が飛んでおり握り飯を落としたりして往生した所である。

今日は巻き寿子を食べようとしたら近くで食べていた柏原さん姉妹や矢田部さん、橋本さん等は折り弁当、柏原さんがいつ造ったのと云うから今朝五時から起きて造ったと答えたら柏原さんの云うことがいい……まあ良く巻けていると、こちらはそれを聞いて女性軍が折り弁当で、こちらは巻き寿子、何か変！

そして高橋安子さんにはオカズをドッサリといただきオイシカバイ！

そのあと満腹になった所で郭々しかじかと下山、城内の満願寺跡や毛利氏ゆかりの清神社そして無事山を降りた所で停車中のバスに乗り途中甲山町の和泉光和堂でおみやげを買って帰りのバスではワイワイガヤガヤと唄、唄、唄と私の横隣りに座っていた橋本さんは良く笑う女性で色んな話をしてあげると転げ廻って笑い、唄の合い間の伴奏がお可しいと云って又笑い、又、佐藤錦ちゃんが輪をかけて声を張り上げ、もう彼女はしどろもどろ！　あんまり書くと

今度会ったら怒られそう、まあそれでも皆んな想い々に足取りも軽く帰って行った。

戦国の三義戦
。巌島合戦　大内義隆の仇
弘治元年（一五五五年）
毛利元就VS陶晴賢
。山崎合戦　織田信長の仇
天正十年（一五八二年）
豊臣秀吉VS明智光秀
。小枚長久年合戦　信長の子、信雄の依来を受け
天正十二年（一五八四年）
徳川家康VS豊臣秀吉

戦国七雄
。相模　北条氏康　一句
。越後　上杉謙信　秋深し
。甲斐　武田信玄　落ち葉踏みしめ
。駿河　今川義元　城の跡
。尾張　織田信長
。〃　豊臣秀吉
。安芸　毛利元就

行事案内

講演会
歴史民俗研究部会主催
「四国遍路の心」
講師　平山房右衛門氏
日時　十二月四日（日）
午後二時ー四時
場所　福山市中央公民館
会費　会員二〇〇円、一般三〇〇円
問い合せ先　種本　実
TEL五四ー二〇四七
（夜間）

忘年会（詳細は別紙参照）
十二月十八日（日）　於松乃家

事務局日誌

八月三日　事務局会議、会報四一号発送。於中央公民館　参加六名
八月二十一日（日）　午後二時ー四時　スライド上映会「中国の故郷を訪ねて」　講師　堤勝義
参加十六名
八月二十四日（水）夜　於ホーセン
役員会、一泊旅行の要項、九月例会、講師謝礼等について討議
参加八名
九月十日（土）　九、十月例会の案内発送
九月二十五日（日）　午後一時
九月例会講演
「戦国大名備前宇喜多氏について」
講師　立石定夫氏
参加三十三名　於中央公民館
十月六日（木）　於ホーセン
役員会、旅行の資料を作成
十月八日（土）　十、十一月例会の案内状発送
十月二十日（木）　十月例会下見
十月三十日（日）　十月例会
バスツァー「備前宇喜多氏を訪ねて」　講師　立石定夫氏
参加五十九名
十一月十日（木）夜　於中央公民館
和室　役員会、忘年会（十二月十八日、於松乃家）、来年度の計画（上下例会、末森例会、古墳めぐり、丸亀例会、城郭部会例会、歴史民俗研究部会例会）等を討議
十一月二十日（日）　十一月例会
バスツァー「吉田郡山城跡探訪」
講師　末森清司氏
参加四十七名

備陽史探訪の会
事務局
〒720　福山市多治米町
五ー一九ー八
TEL（0849）53ー6157

会に対する御意見・御要望は右記まで